

---

# GOD EATER BURST

数え唄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GOD EATER BURST

### 【ノード】

N1003S

### 【作者名】

数え唄

### 【あらすじ】

アーク計画を阻み、再びアラガミと戦う日常が戻ってきた極東支部。方舟騒動の影響や新たなアラガミ出現に揺れるアナグラに、ある日、リンドウ生存の報が入り……。

GOD EATER BURSTの原作にそつたストーリー展開です。

## 帰ってきた日常（前書き）

プログラミングってことで、バトルよりあらすじ的な仕上がりになっています。

## 帰ってきた日常

『アラガミ』。

『考え、捕食する一個の単細胞生物』 『オラクル細胞』の群体である彼等は、ある日突然現れて爆発的に増殖し、世界各地で捕食活動を始めた。

『アラガミ』は有機・無機に関わらず、周囲にある物を捕食することでの対象の特徴を模倣・合成し、多様な進化を遂げる特性を持つていた。

そのためあらゆる環境下で獲物を捕食することが可能となり、その被害はどうまるところを知らなかつた。

人類は彼等を排除すべく戦つたが、いかなる兵器をもつてもオラクル細胞の強固でしなやかな細胞結合を破壊することが出来なかつたばかりか、それらは簡単に捕食されアラガミを強くするだけだった。

こうして、世界はアラガミによつてなす術なく食い荒らされていき、人類は最早滅びを待つほかないと思われていた。

その荒れ寺は、極東支部から程近い山中にある。

そこはかつてアラガミから逃れた人々の隠れ里になつていた場所

だが、ほどなくアラガミの襲撃を受けて壊滅。今現在はアラガミの捕食がもたらした近年の異常気象により、年中雪が降り続くようになったこの地で、襲撃の爪痕を残したまま深い雪の中に骸を横たえている。

寺院内部の入り組んだ地形を吹き抜ける風音は、この地で犠牲になつた者達の嘆きそのもののような物悲しさがあり、鈍い月明かりがさまよえる魂を癒すかのように降り注いでいた。

そんな陰氣で寂しい場所故に、そこは今ではこう呼ばれている。

### 鎮魂の廃寺、と。

廃寺は、入り口である瓦礫の散乱した山門から鐘撞台がそびえ立つ広場へと続き、本殿がどつしりと腰を下ろす最奥に繋がる単純な造りとなつていて、

どこもかしこも雪が厚く覆つていて、薄闇に白銀の組み合わせがどこか綺麗だが、その下にはアラガミによる捕食の跡が残つていてことだらう。

そんな敷地の中心に立つ鐘撞台の袂たもと 現在そこには奇妙なモノがいた。

凍てつく大気をふわふわと漂つそれは、黒い卵殻の表面に大きな目玉と顔の上半分がない女体がくつついた外見をしていた。

『ザイゴート』と呼ばれる下位のアラガミである。  
彼等は個体の戦闘能力こそ低いが、索敵と仲間を呼ぶ能力に長けたアラガミだ。

ザイゴートはひびく興奮しているらしく、赤い一つ目が血走って

尚赤くなり女体の下半身と一体した白い管からは激しく空気を吹き出している。だが、その姿から感じるのは怒りではなく、強い怯えだ。

アラガミは現在生態系の頂点にいる。その彼等を恐れさせるものはそうないはずなのだが。

ザイゴートは周囲を警戒しながらゆるゆると田舎を滑り始めた。そしてゆっくりと鐘撞台の前を通り過ぎ去った……

と、その時だ。

コツン、ヒブリブリした身体に何かが当たった。  
瞬間。

ザイゴートが猛烈な勢いで振り返るや否や、一つしかない田玉でそこにあるものを鋭く睨みつける。  
が、そこには変わらぬ雪景色が広がるだけ。  
思っていたものは見当たらない。

不満げな中にもどこか安堵を含んだ唸りを上げかけたその時、またしても音。今度は雪の中に何かが落ちる音だ。  
音に引っ張られるように見下ろした先には、見慣れぬ物があった。しかし、そのスプレー缶くらいの大きさの金属が何なのか、ザイゴートには分からぬ。

対処に迷った一瞬が、全てを決めた。

ザイゴートが何かしらの反応を見せる前に、スタングレネードが弾けて莫大な光量と音波を炸裂させる。

女性の断末魔に似た金切り声が夜闇の静寂を引き裂いた。

俄かに視覚と聴覚を潰されたザイゴートが怯んだその隙に、鐘撞台の陰から人が飛び出した。

力強く厚い雪を踏みしだき、ザイゴートへと一直線に向かつ。十分に距離を詰め、ダン！と一際強く雪原を踏み締めて跳躍、身体全体を振り回すようにして手にした長大な刃を相手に叩きつけた。

「ふう！」

声も上げられないまま一ついに分かれた肉塊が雪の中に落ちる音を背後に聞いて、『ゴッドイーター』蕪木ユウは止めていた息を一気に吐き出した。

後ろで畳むように結わえた黒髪に、同じく黒い大きな瞳。愛嬌のある顔立ちだが、もつたいないことに今は何の感情も見て取れず、身に纏つた堅苦しいF式の上下も相まって一層冷たく感じられた。手にした『神機』の刀身は『火刀』。赤い日本刀の形をした代物である。

彼女は立ち上がり、ザイゴートの死骸に近づくと、右手の神機の切っ先を向ける。

すると神機の刃が縮んで引っ込み、代わりに柄の根本から黒い顎が迫り出す。

獸か、あるいは竜とも見えるそれは、一瞬のタメの後、勢い良くザイゴートの肉に噛み付いた。

それは捕食と呼ばれる行為。

彼女が『神を喰らう者』<sup>ゴッドイーター</sup>と呼ばれる所以であり、課された義務でもある。

「ゴッドイーターとは、日々増殖し勢力を増すアラガミに対抗する

ため人類が生み出した人間兵器の総称だ。

オラクル細胞を体内に投与された彼等は普通の人間を遙かに凌ぐ能力と、体内のオラクル細胞を制御する右腕の赤い腕輪が特徴で、様々な利権と引き換えに生体武器『神機』を持って戦う戦士である。

神機が剣形態に戻ると、神機のコアが脈打つように明滅した。

「ミッション完了」

それを眺めるユウは一切の油断も遊びもない冷徹な戦士の表情で言い、

「…なーんてね」

次の瞬間、にぱっと照れたように笑う姿には、彼女本来の人柄が表れていた。

刀身にこびりついた体液を払うため軽く剣を振っていると、コアを失ったザイゴートの身体がザア…と砂細工のように崩れて雪に広がった。黒い染みが雪を汚すのも束の間、あつという間に霧散して消える。

もう見慣れたアラガミの死に様であった。

ただ、死に様とは言つものの、正確に表現するとアラガミが死滅することはない。

何故なら例え細胞を統括するコアを摘出してアラガミを倒しても、彼等を構成するオラクル細胞が死ぬわけではなく、細胞そのものを死滅させない限りどこかべつの場所で新たな個体を形成してしまうからだ。

しかも人類は、このいたひじりを断ち切る術を持たない。

故にアラガミを地球上から排除するのは事実上不可能だと言わ  
ている。

「ああっ！ もうやつつけちゃったの？」

後ろから声をかけられて振り向くと、コウの部下が駆け寄つてく  
るところだった。

「おや」「ウタ。遅かったですね」

そう言つて迎えると、藤木コウタは全てを悟つたようだった。

「何だよー。結局コウの一人勝ちかー…」

悔しそうに唇を尖らせたコウタに苦笑して、コウは肩を竦めてみ  
せる。

「運がよかつただけですよ。ここを通り掛かったら、偶然見つけた  
んです」

「運ねえ…」

納得いかなそうな顔のコウタに再び肩を竦め、それからかい  
混じりに言い放つ。

「そ・れ・よ・り。約束の件、忘れないでくださいよ

するとコウタは、頬を膨らませて自棄氣味に答える。  
ヤケ

「わあーっとるよつ！次の配給で好きなの持つてけ」

「毎度」

機嫌よく笑うコウを面白くなさそうに見ていたコウタは、突然一  
ツトの上からガジガジと頭を搔いてからビシィーと指を突き付けて  
きた。

「もつかいだ！次で勝つて選択権を取り戻す！」  
「ほつほつ？」

未だ戦意の衰えない少年の言葉に、コウはニヤリと不敵に笑む。  
腕を組んで胸を張り、まるで見下すよつな格好で言い放つ。

「威勢の良いことですね。いいでしょ、分かりました。勝者たる  
者、いつ如何なる時でも万人の挑戦を受ける義務があります。確か  
【贖罪の街】　　旧市街でオーガテイルが確認されてたはずです。  
そこでケリを着けましょ。まあ、無駄だとは思いますが」

「コウは高飛車なお嬢様みたいな態度でハンと鼻を鳴らし、

「そんな余裕でいられるのも今のうちだ！見てろ。次は勝つからな  
！」

「コウタは拳を固く握りしめて憎き敵を叩き潰すことを誓う。  
バチバチッ！と、まるで雷光のような激しい火花が二人の間で  
飛び散り、燃え立つ闘志が炎となつて背景を塗り消す。

と、そこへ、

「…何してるんですか二人とも。もう終わつたんですか？なら声を

かけてくれればいいのに」

ザクザクと足音を立ててやつて来たのは一人の女性。

「あ、ノリの悪いサクヤさんとアリサだ」

コウの意地悪な言葉にサクヤは苦笑し、先の声の主であるアリサはグレイの髪に指を絡めて撫然となる。彼女達もまた、コウの部下である。

「当然です。命懸けのミッションに遊び半分で挑むだなんて、いつたい何を考えてるんですか？」

初めて出会った頃は本当に無愛想なだつたアリサだが、最近は随分と表情豊かになつてきてい、つれない中にも柔らかなものを感じさせるようになつている。

そんな後輩隊員の可愛い変化に、ついニヤつきやつになる口元を隠すため、コウはわざとしづく唇を尖らせる。

「遊び半分とは失敬な。私達はいたつて真面目に遊んでいるんです！」

「遊んでる」とこ変わりはないじゃないですか？…言い訳になつてません！」

的確なツッコミ。それは彼女が極東支部に来て手にした技能である。その修得に一番貢献したのは多分コウである。理由は、言わずもがな。

「まったく！あなたはリーダーなんですから。もっと真面目にやらなきゃ駄目じゃないですか！…ちいさなコウタの悪ノリに乗つからな

いで下れこ

「めつー」と毎の姿が今日も可愛いアリサは、こつもコウの心を  
容易<sup>たやす</sup>く揺さぶる。

もしこれでアリサがどこかの学校の制服を着て眼鏡をかけていたりしたら、コウはすぐにでもそのロシア産巨乳学級委員長を押し倒していろんな所を撫で回していただろつ。……今度着せてみるか？

「聞いてますか、コウ？」

ひづらの胸の内を知らないアリサが何やら言つてこるが、ビリやつて彼女に眼鏡と制服を着せるかを考えるので忙しいコウは「もちろん」と、とりあえず生返事を返す。

「堅いな~」

「ウタの脣<sup>くちびる</sup>にアリサがギロリと睨みを利かせると、ウタはわざとじしく明後田の方を向く。

そこで二つものように助け舟を出したのは、第一部隊のお姉さん的存在のサクヤである。

「アリサ。お説教はもう少しの辺にしてあげて、そろそろ帰りましょ

う  
「そうですね」

それに同意したのはアリサではなくコウだった。彼女は言つ。

「早く帰らないとアリサとサクヤさんのスベスベお肌が霜焼けになっちゃいますもんね」

サクヤのシングルクロスもアリサの「ゴーティニアモー」の腕・へそ・脚といろいろモロ出しで、しかも兩人ともモデルのようなスタイルを隠す氣が全くない、色気全開大盤振る舞い状態なのだ。こんな寒い所でする格好ではないが、寒さくらい氣合いでカバーするのが女の子のオシャレである。というか、ゴッドイーターならこのくらいの寒さは薄着で問題ない。

「ゴウつーもう、何言つてるんですか」

アリサが条件反射的に咎めてきたが、それで止まるゴウではない。

「まあ、個人的にはもう少しここで頑張って、強めの風が一人のアレとか「ことかめぐり上げるのを待つてもいいんですが」「ホントに何言つてるんですか！？」

「先行くわね～」

真面目な顔で馬鹿なことを思案するゴウと、白い頬を紅潮させて怒鳴るアリサと、大人のスルーカでさつさと背を向けるサクヤ。三者三様の後ろ姿を見つめ、ゴウタはひつむり苦笑していた……が、

「いやいや。そう考えてるのは私だけじゃないですって。ほら、コウタだってニヤニヤします！！」

「おまつーーなんつーことを……！」

そんなこんなで帰途についた四人だが、しかし、少し歩いた所で  
殿のゴウが足を止めた。

そこは池に囲まれたお堂の辺だつた。周囲に月明かりを遮るもの  
がなく、このフィールドで最も明るい場所だろう。

コウが田を向けているのは左手の 本殿に続く階段の方向だ。

「……」

コウは引き寄せられたよひに無言でそちらへと歩き出す。山門に向かう仲間達は話すのに夢中で彼女の動きに気づかない。  
サク、サクと雪を踏んで彼女が向かつた先は階段 ではなく、  
その脇の崖になつてゐる所だつた。

「…ツ！」

そこに立つた途端、刃のように冷たい風が少女目掛けて猛烈に吹き付けた。  
コウは顔を背けて弱まるのを待ち、冷えた頬をさすりながら前に向き直る。

そこには、夜の大平原が広がつていた。

濃紺色の波立つ水面で踊る月光の幻想的なきらめきは、周囲の凜と澄んだ空氣と相まって強く胸を打ち震わせる。

この海が『日本海』と呼ばれたのも今は昔。アラガミの出現とその後の人類の食い合いで国の境目が意味を成さなくなつて久しい現在は、便宜上頭に『旧』を付けて呼んでいるだけである。

そんな洋上にぽつんと浮かぶ大きな島があつた。

その島の名は『エイジス』。“神の盾”の名を持つ人工島である。

人類最後の砦として建造されている巨大な球形の島は、内部に居住区画や生産区画を始めとするアーロロジーを維持するための施設を内包し、さらには対アラガミを含む最先端の科学技術が詰め込まれており、その安全度はこれまでとは桁違いだと言っていた。

そんな人類の楽園を築く『エイジス計画』の実現は、常に死と絶望に晒されている人々にとっての唯一と言つていい希望だった。

しかし、その希望は少し前に潰<sup>つい</sup>えてしまった。

またしてもアラガミによつて。

突如エイジスに出現したアラガミ『アルダノーウ、ア』の急襲により島の大部分が破壊され、計画の責任者がその崩落に巻き込まれて死亡。資源に乏しい今の状況では修繕は難しく、『エイジス計画』は事実上の凍結。島は閉鎖を余儀なくされてしまった。

その事実を公開したフェンリルは当初、人々のエイジス計画に対する期待度を考え暴動が起きることを警戒していたが、人民は思いのほか大人しくその事実を受け取った。だからこそ、世界はこうしていつも通りに回っている。

しかし、それが決して良いことだとはユウには思えない。

今回のようなアラガミ絡みの事件は今時珍しくもなく、それはきっと一因でしかないだろう。

何より問題なのは、彼等が希望を奪われることに慣れ、絶望に抗<sup>あが</sup>うことをしなくなっていることにあるのだと思う。

先に述べたように、ゴッドマイターはアラガミから人命を護るた

めに作り出された存在だ。

コウも「ゴッドイーター」になつて日は浅いが、極東一の実力者としてこれまで多くの人命を守つてきた。

けれど、そのコウの力をもつてしても墮落した人々の心までは救えない。

(どうしたもんですかねえ…)

エイジスを眺めながら溜め息を吐く。あそこでの一戦以降ずっと考え続けているが、今だにその答えはないままだ。

(まあこんなこと、私一人で考えていても仕方ないのかもしませんが…)

それでも考えずにいられないのはきっと、

『みんなといたいから… もうは… わなならずるね… はなれててもいつしょだから』

そう言つて、田の前から消えてしまつた純白の後ろ姿が心の片隅に生きているからだらう。

あの子は己を殺してまでこの世界を守つてくれた。人間を信じ、コウ達に明日をくれた。その想いに応えたいと思つのは、決して間違つていはないはずだ。

と、

「…………コウ！そんな所にいたんですか？」  
「何してんだよ、早く帰ろうぜ？..」

「ウガいな」ことに気がついて引き返して来たりしこアリサとコウタの声で、コウはふと我に返った。そして苦笑。どうやら柄にもなく感傷に浸っていたらしい。

コウは怪訝そうに側まで来た三人に照れ隠しの笑みを向け、努めて自然に聞こえるよひと言つた。

「いえね、たまには挨拶をと思いまして」

そんなコウの言葉に三人は口を揃えて言つた。

「……は？」

「……いや、あの、何でみんな揃つて『ここ』また変なこと言つ出しゃがつたぞ。氣をつける』みたいな顔するんです？」

「……違うんですか？」

「そこ」で意外そうな顔されるとさすがに傷つきもや…」

普段の行いをちゅつぴり反省するコウちゃんだった。

「それで、挨拶って誰に？」

サクヤが優しく声をかけてくれたので、コウは氣を取り直してそれを（、）を指差した。そこで、サクヤ達もコウの意図を察してくれたようだつた。

「ああ、なるほどね」

「コウもたまには良いこと言つんだな」

「じゃ、皆で挨拶しまじゅうか」

口々に言つながらコウの周りに集まり、皆がそれを見やる。

彼等の視線はエイジスのちょうど真上、夜空を美しく飾る蒼い（、）満月に注がれている。

これは混乱を予想して一般には伏せられたことだが、実のところエイジス計画とは実現性のないハリボテであり、その裏で進められる真の人類救済策の隠れ蓑であった。

その名は『アーヴ計画』。

選ばれた人種のみを生かし、それ以外はアラガミもろとも『ノウ・ア』と呼ばれる人工アラガミに喰らわせ、その後アラガミのいない再生した地球で生き残った人類が歴史を紡いでいく。

そのシナリオを描いたのが、ヨハネス・フォン・シックザール。前フェンリル極東支部支部長であり、エイジス計画の責任者もあつた男だ。

彼は一人ひつそりとアーヴ計画の準備を進め、『特異点』を手に入れたのをきっかけに、ついに計画を実行に移した。それは極東支部に大きな波紋を起こし、支部を賛同派と反対派で一分する事態となつた。

しかし結局、最後の最後でノウ、アに組み込んだ『特異点』の反乱により、アーヴ計画は失敗に終わった。

アーヴ計画はシックザールの独断ということでひそかに闇に葬られ、方舟騒動は一応の決着を見ることとなつた。が、ユウ達はそのために犠牲となつた者がいることを忘れないだろう。

それが『特異点』と呼ばれる特殊なコアを持つアラガミの少女・シオである。

彼女がノウ、アを月へ移してくれたおかげで、地球はこうして無事でいられるのである。

星を再生させる人工アラガミは、喰らう生命のない月にあって

もそのプログラムを正しく起動させたらしい。

大気があるのか微かな雲が肉眼で確認でき、乾いた大地を潤す蒼あお

はとても鮮やかだ。

月は今や、いのち生命が息づく美しい星に成長しつつある。

そしてそこには、今もシオが生きている。

少なくとも、自分達はそう信じている。

「シーオーっ！…聞こえるかー？…」

唐突に、本当に月まで届かんばかりの声量でコウタが叫ぶ。咄嗟に耳を塞いでいたコウとアリサは、コウタの行動に顔を見合させて笑い、一緒に声を張り上げた。

「シオちゃん、元気にやつてるー？…」

「シオー！いつかまた会いましょーねー…」

とても楽しそうにはしゃぐ三人に笑みを漏らすサクヤは、一人月に向かって呟く。

「見ててねシオ。あなたが守ってくれたこの世界…必ず守り抜くわ

月はそんな四人を見つめて微笑むかのように、淡く蒼く輝いていた。

多くの犠牲が生み出した痛みと孤独は癒されぬまま、いつして日常に塗り重ねられていく。

そしてこの世界は誰もが傷つき、迷いを抱いて苦しんでいても、お構い無しに次の幕を開ける。

だが、それはまだほんの序章に過ぎない。

全ての始まりは、まだ少しだけ先だ。

## 帰ってきた日常（後書き）

皆様お久しぶりです。数え喰です。  
もうひとつこの作品のこともあります、推敲仕切れないまま投稿した読み  
苦しい物に、お付き合いいただきありがとうございました。  
……言い訳しちゃってごめんなさい。もしも面白いと思つていただ  
けたなら幸いです。

## 歩み始めた者達（前書き）

なんと今回からオマケ付きー。

## 歩み始めた者達

「　　といつわけで、廃寺のザイゴート神属3体。確かに討伐しました」

「はいー。」苦勞様でした

コウの報告を書類とともに受け取った竹田ヒバリが、ニッコリ微笑んで労ってくれた。彼女が笑うとそれだけで薄暗いエントランスがパアッと明るくなる気がする。

「ヒバリちゃんの笑顔って、まるでお日さまみたいですよね。見ると胸がぽかぽかしてきます」

カウンターに頬杖つきながら言うと、ヒバリは驚いたように口を丸くしてから、おかしそうにクスクス笑う。

「もう、コウさんたらー。褒めても何も出ませんよ？」

それに対してもコウは、上目遣いで意味ありげにふっと微笑む。

「いいえ、すでに最高の報酬をもらっていますよ」

そう言つと、ヒバリが応じて悪戯っぽく「へえ、何ですか？」と返してくれる。

コウはなるべくキザな口調で言ひ。

「あなたの笑顔、ですよーー。」「やだもーー。」

あははは、とかしまじへ一人で笑っていると、後ろから声がかかつた。

「 早かつたな」

振り向くとそこに、フードを田深に被つた少年がいた。

「あ、ソーマ。お帰りなさい」

「ああ」

彼、ソーマ・シックザールは、コウタ達と同じくコウが隊長を務める第一部隊のメンバーであり、前支部長の実子でもある。かつては『死神』と呼ばれた彼も今は丸くなつたもので、無愛想なのは変わらないが他人を寄せつけない雰囲気はだいぶ薄れている。そうなると、コウとしてはついからかいたくなつてしまつ。

「お疲れになつたでしょ？」「飯にする？お風呂にする？それともわ・た・し？」

「…………」

ソーマはコケティッシュにしなを作るコウを一瞥すると、そのまま横をすり抜けた。

「…………頼む」

「あ、はい。対象はクーンメイデンですね。『苦勞様でした』  
「ちょっとソーマ！今のを無視するつてビーー！」ことですか？！」  
んな可愛い女の子が新妻で何が不満かっ……」  
「つるさいバカ。そういうことは他の奴とやつてる」

つづけんどんに言い返されたコウは唇を尖らせて頭を搔ぐ。

「つれないですねえソーマは。もっとユーモアを身につけるべきですよ」

それを聞いたソーマがジロツヒツチを見た。

「ユーモアでアラガミが倒せるか  
「女の子は押し倒せるかもしません」  
「その返事はどうなんでしょう…」

「」  
自然なユウの返答に、ヒバリが引き攣った笑みを浮かべ、ソーマは呆れたように溜め息を吐いた。

「どうした？」

そこに再びかかる声。2階からヒールの音を響かせて下りてきた人物は三人の顔を順に見て「ふむ…」と納得したように頷くと、何故かユウを見る。

「ユウ、また何かやらかしたのか？」

「うわー、開口一番ですかー。でも、私は負けません。偏見には毅然とした態度で抗議しますよ！」

事実を棚上げにしてユウは迎え撃つ態勢を取る。すると相手雨宮ツバキはちょっと黙った。

「……そうか。それはすまなかつたな」

「へ？」

突然の謝罪はユウの不意を打つた。戸惑うユウをよそにツバキは

続ける。

「私はてっきり、お前がまたバカなことを言つてバカなことをやつているものだとばかり思つていた。許してくれ」「？！」

「Jの時のコウの内心を表わすには、言葉と「ツーシールは拙な過ぎる。敢えて例えるなら、テストでの点取つたのにこつも厳しい母親が妙に笑顔で出迎えて来たみたいな感じ。

(怖っ！これは新手の面白トラップですか！？)

内心怯えつつ、罷の可能性を考えてそれでも面白せずにいると、ツバキはとても悔いたふうにぽつりと呟く。

「偏見でものを見るよつになつては上官失格だな…」

「すいませんでした――――――――ツバキさんは間違つてません！私は確かにバカなこと言つてバカなことやつてしましました――――！」

あまつさえ落ち込んだ顔をされると、コウはもはや事実をぶちまけて自責の念に喘ぐしかない。地べたに呑きつける勢いで頭を下げる。

さしものコウもツバキには勝てないのだった。

「全く。Jの間の喧嘩を止めた時のお前はどう行つたんだ？」

素に戻つたツバキの溜め息混じりの言葉に、ヒバリが両手を胸の前で組んで同意する。

「あの時のコウさんカッコ良かつたですよね～」

「…ふん」

田をキラキラさせるヒバリとは対称的に、ソーマが面白くなさそうに鼻を鳴らしたのはきっと、彼なりに騒動について思う所があるのでない。

騒動が起きたのは、ほんの3日前のことである。

事の発端は、軽い言い争いだったそうだ。あとで思い返してみても、何故あんな大騒ぎになつたのか分からぬよ。

理由を挙げるなら、ひとえにタイミングの悪さの一因に及ぶ。アーケット計画がなくなつたとはい、支部内での賛否の対立は未だ尾を引いている。そんな時に起きた喧嘩騒ぎである。

誰にとっても、募り募つた感情を吐き出すにはちょうどよかつたのだろう。特に事件以降、肩身の狭い思いをしてきた賛同派にとっては。

ハツ当たりだと分かつてはいても、それで納得できるほど人間は強く出来てはいない。

そして、今にも殴り合いを始めそうな彼等に待つたをかけたのがユウである。

「あの時は肝を冷やしましたよ…。ミッションから帰つたらあちこちで胸倉掴み合つてゐるんですもん。何事かと思いました」

今までこそ笑い話だが、その時は場を收めようと、柄にもなく必死に大声張り上げたりしたものだ。その甲斐あってか怪我人が出なかつたのは幸いだった。

「正直、アーケット計画の後遺症はもつと長く続くと思っていたんだが

…。最近の皆の顔が明るいのは、お前の言葉のお陰だな

普段は厳しい上官が微かに微笑んで口にした言葉に、コウは「うふつ」と相好を崩す。

「仲間の悩みを聞いて上げるのもまた、仲間の大変な役割ですよ

軽い調子で言いながらそれに、と内心で付け加える。

(責任の一端は私……いや、私達にもありますし)

結局ノウ、アを食い止められなかつたものの、ユウ達がアーク計画を阻止してしまつたのが、支部の不和を招いた原因とも言える。ゆえにユウ達にはその責任を負う義務がある。それは第一部隊みんなで話し合つて決めたことだ。

「…………お前らしいな…………」

そう言つたツバキは、いつの間にか大人になつた妹を見るような、とても優しい目をしていた。

和やかな雰囲気が満ちる中、ピー、ピーと電子音がした。場の空気が一瞬で張り詰め、ヒバリがカタカタと端末のキーを叩いた。

「……【嘆きの平原】に墮天ハラハラが出たみたいです。数は1。至急討伐をお願いします!」  
「了解しました」

頷き、コウは隣の部下を見る。

「ソーマ、今から大丈夫ですか?」「

「ああ。お前こそ、無理してないだろ?」

無愛想だが頼もしい返事にユウも頷き返す。第一部隊のリーダーがザイ、ゴート相手に疲労するわけがない。

「他の連中はどうする?」

ツバキの問いに、ユウは形のいい顎に指を当てて、ちよつと悩むそぶりを見せた。

『ゴンゴウ』は仏像の如き見た目を持つ猿人型のアラガミだ。巨体を活かした近接主体のバトルスタイルは、良く言えば豪快、悪く言えば力任せなので倒すのに苦労はない。

墮天種が通常より強力な個体なのは知っているが、ユウとソーマで倒せないことはないだろう。となると、問題は

「……若い男女が一人きりということですか」

ソーマの「アホか」という弦きを華麗に聞き流して視線を周囲に向け、近くにいた金髪の青年に目をつけた。

「あつ!カレルさんヒマー?一緒に行きませんか?」

するとカレル・シユナイダーは、面倒くさそうにこちらを見たものの、小さく「分かった」と言つてきた。ちょっと驚いた。

「ええ…と」

「何だよ。誘つたのはお前だろ?」

「まあそなんですけどね。でもいいんですか?報酬そんなに大きくはないですよ?」

「金にはなるだろ？…。それに最近は妙な依頼ばっかで、数こなさねーと稼ぎにならねえんだ」

彼の言つ『妙な依頼』とは、ターゲットのアラガミが何者かにようつて倒されていることだろう。コウも行き会つたことがある。死骸がズタズタになつていることから、犯人が人ではないことは明らかだが、それ以上はまだ分かつていらない。

階段へと向かいかけたカレルは、不意に「それと」と足を止めた。

「俺は今でもアーク計画が間違っていたとは思わない。…以上だ」

そう言い切つたカレルは、さつわとつ階の出撃口へと向かつた。さつきの会話を聞いていたらしい。

「あ、待つてください。じゃあ二人とも、行つてきます」

ツバキ達に別れを告げ、コウはソーマを連れて駆けて行つた。

「コウさん、頼もしくなりましたね」

二人の姿が見えなくなると、ヒバリが感慨深げに呟いた。

「…そうだな…」

ヒバリに同意し、ふと思い出したのは喧嘩を止めた時のコウの姿。あの時一足遅く駆け付けたツバキは、胸を張つて人々の前に立つ

彼女の背中に、その成長を強く感じたものだった。

迷える者に道を示した彼女の言葉は多くの者を救つたはずだ。現にさつきのカレルも物言いこそ否定的だが、雰囲気はむしろ前向きだった。

(リングドウ：あの新人が、ずいぶんと立派に育つたぞ)

シックザール前支部長の策謀により命を落とした弟に心の中で語りかける。力をつけた今のコウを見たら、あいつは何と言つんだろう。

そこまで考えたツバキの心に、不意に嫌なものが過ぎつた。その正体を確かめて、ツバキは呟く。

「……いや、むしろ成長したからこそ心配か」

「？何でですか？」

小鳥のように小首を傾げるヒバリを見ることなく、ツバキは過去を思い出すように手を細める。

「後ろ姿がな、ウチの弟に似てきたからや。……あいつのよつて無茶をしないよう、私達が見えていてやらねばな」

「……そうですね……」

オマケ

ある日の休憩所での会話。

「……最近、アナグラでシオを見たような気がするんだ」

ソーマの思わず発言は、一緒にいたアリサと「ウタに惊讶な顔をさせた。

「シオちゃん、ですか？」

「見間違いじゃねーの？あつ、もしかしてあんまり恋しくて幻覚見たどガバツ！？」

「ウタを殴り飛ばしたソーマは何事もなかつたかのように続ける。

「…ハツキリと見たワケじゃないが、ふとした瞬間に視界の端にアイツの姿がかすめる気がするんだ。現実的じゃないのは分かつてる。だが、何でだらうな…アイツがすぐ近くにいる気がするんだ。…柄にもねえな」

「ソーマさん…」

アリサも現実的ではないとは思った。しかし、彼のそんな思いは素敵なことだとも思つ。

だから彼女は微笑んで言つた。

「そんなことないですよ。シオちゃんは優しい娘ですから、もしかしたらこいつそり私達を見守つてくれてるのかもしれませんよ」

「そうか… そうかもな…」

そんな会話が聞こえる、近くの曲がり角の陰にて。

(どうしよう… しょみつし過ぎて出でられない…)

白髪に白いドレス姿のコウがひそかに頭を抱えていた。

## 歩み始めた者達（後書き）

「うちはいいこいつキャラです。見捨てないであげて（泣）

## 全ての始まり（前書き）

お待たせしました

## 全ての始まり

笛の音にも似た風音が、“彼”的耳に悲哀の余韻を残していく。

「はあ…はあ…はあ…」

熱に浮されたような、ひびく苦しげな息遣い。

吹き出す汗を拭いてもせず、雪を踏む足取り重く、“彼”は前へ。

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

今にも倒れ込みそうなほどふらつく“彼”的姿が、静謐で美しい白銀の夜を終わりのない氷獄に見せる。

そのつむぎ、風の中に異音が混じり始める。  
ぐちやぐちやといふ、泥を踏むような不快な音。

正体はすぐに知れた。

道の突き当たり、お堂を囲む池のほとりで、大きなものが身を固めていた。首はその巨体の向こうから聞こえてくる。

“彼”的氣配に気づいたのか、それがのそりと振り返る。  
虎のような体型。

見上げんばかりの巨体を守る鎧のよつた青と白の外殻。  
頭部は獣のそれではなく、彫像のよつた白い女の顔。

『プリティービ・マータ』。

それが、このアラガミの名。

オオおオオおおおオおオーーーー！

プリティビ・マータが咆哮した。明確な敵意の波動にビリビリと大気が戦き、大地が竦み上がつて震える。捕食中だったオーガティルから新たな獲物に標的を変えたらしい。が。

「おおおおおおおおおつーーー！」

咆哮の直前、雄叫びを上げてすでに飛び出していた“彼”は、上段から袈裟掛けに一刀。いつの間にか手の中にあつた赤い剣で切りつけた。ノコギリのような刃が肉を強引に引きちぎる。

ギィアアアアオオオオ……！

断末魔が天を突き、巨体が音を立てて雪に沈む。

「はあ…はあ…」

“彼”は死骸の脇を抜け、引き寄せられるように崖の方へと歩いていく。

“彼”的紅い瞳が、そこに広がる光景を捉える。

「はあ…はあ…はあ…うぐつーうう…」

不意に“彼”は異形の右腕を抱え込むようにして呻いた。  
その腕から溢れ出す深い憎悪の如き紫炎。

内から突き上げる何かを堪えるよつて、“彼”的背が一瞬震え、  
そして、

「 ウウウオオオオオッ！－！」

蒼い月を前に“彼”は吠える。  
聞く者の魂を畏縮させる咆哮は、月にも届かんばかりに響き渡つ  
ていった。

音が消えた。

凄まじい轟音が鼓膜を痺れさせたのだと気づく余裕もない。

巨人の平手を喰らつたような衝撃と熱風が身体を打つ度、ユウは  
生きた心地がしなかつた。

展開したタワーシールド『剛炎タワー』の陰で渾身の力で踏ん張  
つていた彼女は、硬直から解放されるやいなや、すぐさま盾をしま  
つてバックステップ。アラガミが振り下ろす鉄の塊みたいな前脚を  
躱す。

まるでキャタピラのような脚の持ち主は《クアドリガ》。

人間の兵器を喰らい、模倣した戦車もしくは移動要塞の如き威容  
を持つアラガミである。

一見本体とも見える四肢のない人骨が、目玉のない目で仕留め損  
ねた獲物を見下ろす。

「ヒュッ！－！」

着地と同時にユウはダッシュ。

空けた距離を詰め、『イーブンワン』を前脚に叩きつける。ぐりっと搖ぐ巨体を見て、彼女は反射的に指示を飛ばす。

「サクヤさん、『ウタ!』

返事は言葉でなく行動で返ってきた。

クアドリガの右側面に無数の光弾が直撃し、その衝撃で体勢が一気に崩れる。

しかしクアドリガは脚を踏ん張り、かろうじて横倒しになるのを防ぐが、すぐさま体勢を整えるには到らない。

「りやああああつー！」

そこへ走り込んできたのはアリサ。

彼女は敵の眼前でハイジャンプ、位置が低くなっていた觸體の頭蓋に『アウ、エンジャー』を突き立てた。ズブリと、紅い刀身が深々と埋まる。

ぎいいいいつー！

金属が擦れ合ひのような甲高い悲鳴を上げて、巨体が身をよじるようにして起き上がった。……アリサをくつつけたまま。

「キャアアアアアツー！」

アリサは突き立てた神機にしがみついたまま、左右に振り回されている。

「アリサツー？」

サクヤが悲鳴地味た声を上げるのが聞こえる。

その間にユウは準備を終えていた。

両足を前後に開いて腰を落とし、馬鹿デカイ刀身を肩越しに後ろに回して構える。刀身に走るオラクル細胞が活性化し、刃を覆う。

「アリサっ！離れて！」

声に反応したアリサが、骸骨の胸を蹴つて神機を引き抜き、絶妙なタイミングで場所を空ける。

「だあああありやああああああっ！…」

気合い一発、全身の力で捩じ込むように、バスター・ブレードを振り下ろす。

斬撃が、アラガミの頭頂からまつすぐに走り抜け、

それが決着だった。

「きやあああだなんて！可愛すぎますよアリサ！」

「もう、しつこいでですよユウ！…ていうか、引っ付き過ぎです！」

アナグラのエントランスで、さくやとアリサの攻防が展開されていた。

他の二人は早々に部屋に引っ込んだし、周りの人々もいつものこと放っているので、邪魔者（アリサにとつての助け船）はない。

そんなわけでさつそく腰に抱き着いてくるゴウの頭頂を、真っ赤な顔のアリサが肘で押し返しているのだった。

「照れないでくださいよ～。女の子どうしなんだから良いでしょ？  
ヨイではないかヨイではないか～」

「人の目を考えてください！ ほら、子供達が変な目で見てるでし  
ょう？！」

「言われてみれば、こちらを遠巻きにしてる子供達が「向してん  
のマイツ等？」といつ顔でポカンと見てる。」

「むむう…」

「分かりましたか？じゅあわせたと離れて下せー」

ゴウの泣い顔を反論なしと見たらしくアリサが言つ。

「…あのちいちゃい女の子は3年後が楽しみですね。今から睡つけ  
ときますか…って、アリサ、何で首に腕回すの？ そんなに力込め  
るヒ跡じこですよ。こや、あの、もひて首、絞まつて…ちよ…ぐえ

…」

アリサの腕の中でじたばた暴れていると、カウンターからヒバリ  
がゴウを呼んでくる。

「ゴウちゃん。リッカさんから伝言を預かつてるんですけど  
「ぐはつ…ほり、アリサ…私行かないと……」

「これ幸いとそれを利用するゴウに殴打しそうな顔をしつつ、ア  
リサは腕から力を抜い

「ちゃんとお仕置をされてから寄つてくださいね」

「そんな殺生なぐげええつ！？」

口からは医療区画の廊下を歩きながらぼやく。リックの「伝言は話があるのでサカキ博士のラボへ来てほしい」というものだったからだ。

(話りてなんでしょうね？…まさか昨日？…)

なんぢやつて、とか思いながら突き進たりのドアの前まで来る。

邪魔者ですな、などと思いながらドアを開ける。

「あ！ 来てくれてよかつた……」

中にいたリッカがそう言って出迎えてくれた。続いて博士が、

「……あれ？」

ユウは首を傾げる。

部屋の主の、あの考への読めない「ヤーヤ笑いがない。

「博士は……いないんですか？」

「ああ、うん。用があるひじくて、君への話のついでに留守番頼まれてるの」

「へえ~…」

適当な相槌を打つて、コウはふと氣づく。

「ここにいるのはリッカだけ 他には誰もいない これはつまり、

「……チャンス…？」

「うん、意味分かんないけど、何となく身の危険を感じるよ。」

じりじりと間合いを計る魅惑の一の腕 もといリッカ。身体の凹凸に難ありだが、可愛い顔立ちに白い滑らかな肌でコウを狂わせる女の子なのだ。

「やだもうっ、身の危険だなんて！何にもしませんよお

「…とか言いつつ、後ろ手に鍵かけようとしてない？」

「うわあ。私って信用ないんですね」

じと目で睨まれたコウは、目一杯心外そうな表情を作る。……ドアに伸ばした手をそつと引っ込めながら。

「……それで、私に話つて何ですか？」

「……ああ、うん…あのね…」

コウが本題を口にするとい、リッカは見るからにションボリした。

「…実は…あなたの神機ね…ちょっと調子が悪いみたい…」

それを聞いたコウは、リッカが暗いことに納得こそしたが、別段驚くことはなかった。

アーク計画からこつち激戦続きで、なんやう不具合の一ひとつも出る頃ではあつたのだ。

「そうですか…」で、具体的にはどじが悪いんです?」

「…ジョイント部分の損傷が激しくて…応急処置はしたけど…」

暗い顔のままのリックにさすがのコウも一抹の不安を覚える。が、一部隊を率いる者としてそれを表には出さず聞く。

「戦えないくらい酷いんですか?」

それに対してもリックはゆるく首を横に振る。

「それは大丈夫。ただ、君の神機を修理するパートにストックがないで、しばらく修理出来そうにないの。不調を感じたら、すぐに帰還するよつこしてね」

「了解です、リック」

軽く敬礼してコウは微笑んだ。とりあえず、仲間達だけを危険な目に遭わすことはなくて済みそうだ。

安心したコウはまたも軽口に走る。

「さて、それじゃあリック（で）、遊びましょうか」

「何だらう、ここで頷くと大変な目に遭いそうな気がする」

「どうか、仕事があるからまだ無理」と苦笑するリック。  
しかし、コウはめげない。

「ちょっとくらい良いじゃないですか。痛くしませんよ。少し目をつぶつてくれれば平氣です」

「す、じ、へー、寧な口調で、ま、ひ、て、む、じ、は、下衆だね…」

両手をわきわきさせて距離を詰めるコウに對し、頬に汗を伝わせて後退るリッカ。

と、そんな楽しいひと時を邪魔するよつこ、

『第一部隊一至急エントランスに集合して下さーー繰り返します…』

スピーカーからそんな知らせが聞こえ、コウは軽く肩をすくめた。

「あら、呼ばれちゃいましたか。仕方ない、行ってきますね」

それに対しリッカは、見るからに胸を撫で下ろしつつ言った。

「何度も言つけど、君の神機は応急処置しかしてないんだから、無理しちゃ駄目だよ」

「任せて下さいー、神機を壊さないよう頑張ります」

ウインク一つ残して踵を返そつとしたコウに、リッカは「そうじやなくて」と続ける。

「君が怪我しちゃ嫌だよって言つてるの。神機使いの代わりはいても、君の代わりはないんだから」

そう言われて、コウはほんの一瞬、言葉を返せなかつた。（、、、、、、）。

しかしすぐに、胸に生まれた暖かくてじんじんぱゆい感じにウフフ、と笑う。

突然変な顔で笑い出したのを怪しく思ったのか、リッカは表情を

引き攣らせて後退さる。

「また君は変な想像して」

「リッカ」

不意に口調が変わつて驚いたのか、リッカは言葉を止めた。  
ユウは彼女を見つめて微笑み、

「ありがと」

そう言つて今度こそ部屋を出たのだった。

一方、部屋に残つたリッカは、薄い胸に手を当てて「ううう…」  
と唸つていた。

（ユウつて…あんな綺麗に笑う娘だつたなんて…）

いつものふざけた人懐っこい物とは違う、大人びて、穏やかで、  
心底嬉しそうな 幸せそうな表情。

その、まるで別人のような彼女の笑顔が脳裏にちらついて落ち着  
かない。

（あうう…）

はつきり言つて不覚にも、ちょっとだけキュンとしてしまつたの  
だ。

(……ダメダメーこれじゃコトの思ひ靈だよ)

纏わり付く感情を振り払つように頭をワンパン振る。

(でも…)

何故か、彼女の笑顔の向こうに、計り知れない陰りを見た気がしたのだ。

そのことについて深く考える前に、部屋の主が帰つて來た。

「ただいま～！いやあ、留守番頼んで済まなかつたね……つて、どうかしたのかい？顔が真つ赤だけど

「…………何でもないです…………」

もう忘れよう、と心に決めるリックであった。

オマケ

その日、タシナはエントランスの片隅でしゃがみ込んでいた。

「……へへへ…」

何やら手帳を見ながら一いやーと笑っていた彼は、パタンと手帳

を閉じ、天を仰いだ。

(……完璧だ……)

祝福の光を一身に浴びる聖職者のよつたな顔で内心そう呟く。

(これで今度こそ……今度こそ俺は……ヒバリちゃんを『トート』に誘える  
!—)

思い起にせば、ここに到るまで苦労の連續だった。

ヒバリにバレないよう彼女のスケジュールを調べ上げ、仲間内で  
も根回しを済ませ、明日はヒバリを誘わないよつて言ひ含めてある。  
まあその際、女性陣からは例外なく嫌味を言われたのだが。

(女どもの視線にも負けずに頑張った甲斐があつた…)

しばしタツミは胸を熱くしていたが、やがて両頬を叩き気合ひを入れる。

「よしつー！」

準備は万端。

勝率はほぼ100%。

万全を期して、カウンターで書類整理中のヒバリの元へ向かい、  
タツミは声をかける。

「ヒバ……」

しかし、

「ヒツツツバリツツツちやーん！……！」

大声でタツミの声を搔き消し、先にヒバリに話し掛ける者がいた。その人物を見て、タツミは自分のしゃじりに気づいた。

「……コウか……！」

そういえば彼女だけは単独任務中で、根回しが間に合わなかつたのだった。

（……まあいい。今まで散々待つたんだ。ちよつとくらいうち待つてやる  
か）

今にも舌打ちしそうな表情だが、タツミはそのまま自分を落ち着け  
「ヒバリちゃん明日ヒマなら、私とテートしませんか？」

られなかつた。

（ぬあにいいい！？）

鬼の形相を見せるタツミに、近くにいた子供がビクッとなつてい  
た。

殺氣を放ちつつコウかと足を踏み出したタツミは、

「んー、『めんなさい』

ヒバリがそう断るのを見て額の角を引っ込んだ。

「えつ？！何で？」

コウが驚いて問うと、ヒバリは澄ました顔で答える。

「だつてコウさん、何か企んでそうなんですもん」

「ええつ！？そんなことないですよ。ただ純粋にヒバリちゃんと遊びたいだけです。信用して下さい！ね？」

「ん~…」

必死で口説くコウと困ったような顔をするヒバリを見て、タツミは内心ほくそ笑む。

（フハハハハ…！見たかコウ。おら、負け犬はさっさとそこをどけ！ヒバリちゃんを幸せにするのはこの俺だつ…）

勝利を確信し、タツミは余裕を取り戻す。……自分も同じ理由で断られることを考えていないので彼らしい。

そして、ついでに言つなら彼はコウを甘く見ていた。

ヒバリが渋るそぶりを見せた途端、コウは不安一杯な上目遣いになり、そしてそつと小首を傾げて聞いた。

「……ダメ？」  
「……？」

ヒバリが言葉に詰まる。

捨てられた子犬より庇護欲をそそる様子に、ヒバリは慌てたように頷いた。

「わ、分かりました。明日は確かにヒマですから、一緒に遊びに行

きましょうか

「えへへ、やつたー！」

コウは大袈裟に飛び跳ねて喜び、少々強引ながら約束を取り付けられたヒバリも、そんな彼女に満更でもない様子だった。

そこでようやく、気づかなくて良いこと。コウが気づく。

「あれっ？ タツミさんどうかしたんですか？ 何か、貰えたはずの餌を直前で引っ込められたアラガミみたいな顔しますよ？」

その言葉を聞いたのを最後に、タツミの記憶は途絶えている。

その後のことのちにコウはこう語った。

あの時のタツミは、アジュラの敏捷性を得たウロボロス並に手がつけられなかつた、と……。

## 全ての始まり（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あと、まことに勝手ながら拙作の『GATE KEEPER』は、  
レベルに投稿するかも知れないのことでこしたことにして取り止めをさせ  
ていただきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1003s/>

---

GOD EATER BURST

2011年10月7日17時49分発行